吸精の廃墟

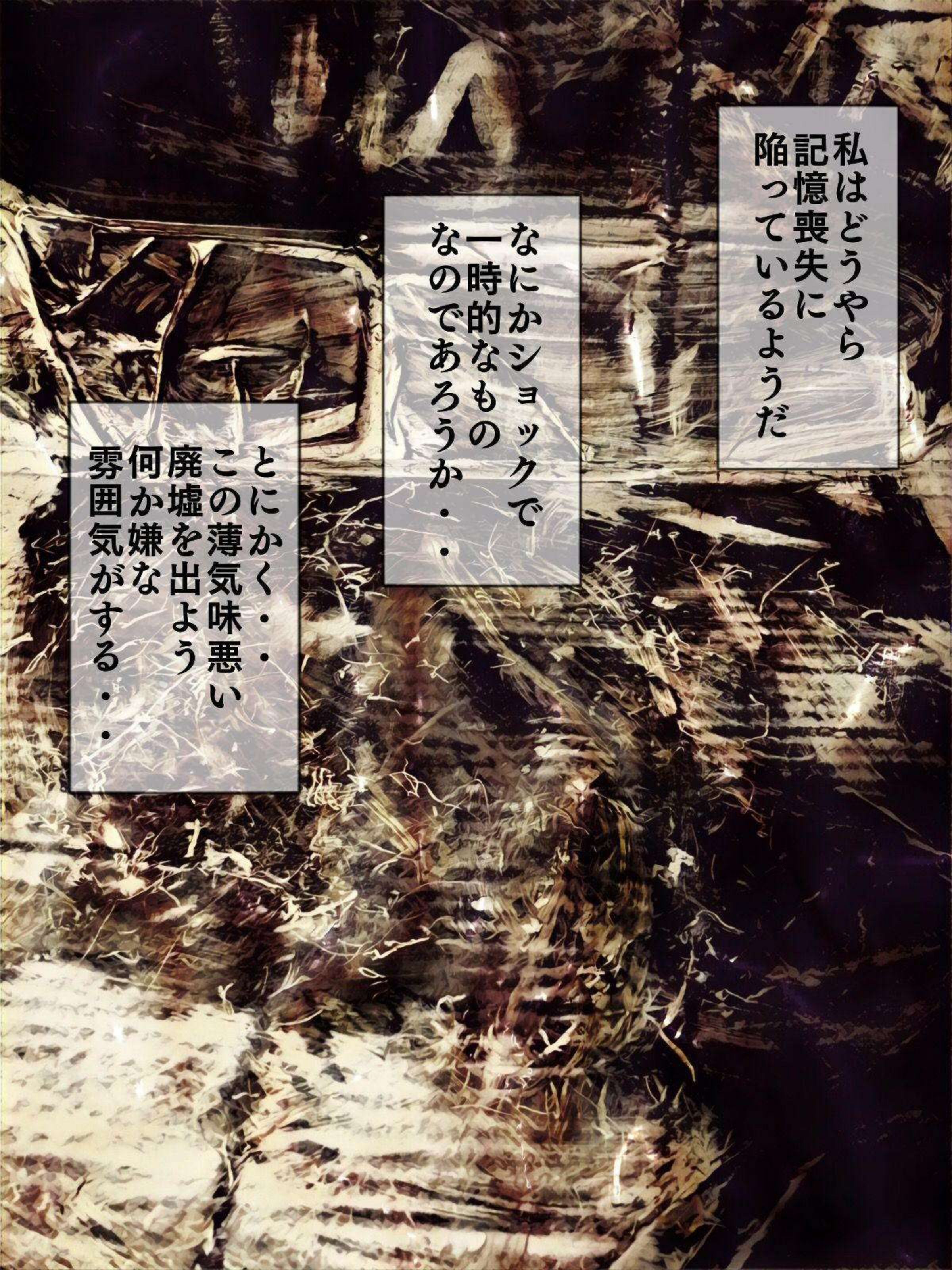
～精液を貪る怪物ナース～

う・・
ここは・・・？

私は気が付くと、
見知らぬ廃墟にいた

辺りには
朽ちたベッドや
点滴、注射器が
散乱しているので、
どうやら昔は病院
だったようだ・・・

私はここで
何を・・・？
そもそも・・・
私は・・・
私は誰だ？
名前も・・・
なにも思い出せない
なんで私は廃墟に
しかも裸で・・・
なにか犯罪にでも
巻き込まれたのか



私はどうやら
記憶喪失に
陥っているようだ

なにかショックで
一時的なもの
なのであろうか・・

とにかく・・・
この薄気味悪い
廃墟を出よう
何か嫌な
雰囲気がする・・・

しばらく歩くと・・・
人影が見えた
「わっ！だ、誰だ！？
私は驚いて声をあげた？」
ピクリとも動かない・・・
「なんだ・・マネキンか・
ここは病院だからか
そのマネキンは
ナース服を着ている

私は裸で肌寒かったので
そのマネキンから服を
はぎ取ることにした

「女性の服だが無いよりましか」
私はそのマネキンに
近づいた・・・
そのとき

ズッ・・
「うわあああ！」
なんとマネキンが
突然動き出したのだ
それはマネキンでは
なかった
顔はのっぺらぼうで
パンパンに膨れ上がった
怪物？幽霊？
とにかく人間ではない
なにかだった

「ひっ・・ひっ・・」
私は驚きと恐怖で
声が出ない
ズッ・・ズッ・・・
すると怪物が
ゆっくりと私の方へ
近づいてくる
「に、逃げなきゃ！」

「うわああ！」
私は全力で逃げ出した
しかし、怪物は私の後を
追ってくる
人間とは思えない
恐ろしく不気味な動きだ・・・
「誰か！誰か助けて！」

「うわっ」ドタッ！
私は慌てて走ったので
足がもつれて転んだ
その隙に怪物に
追いつかれてしまう
「わぁ！やめろ！
やめろおおお！」

怪物は私を抑えつけた
な、なにをする気だ！
離せ！
その力は強く
抵抗できない

怪物はそのまま
自分の股を
私のペニスに
あてがい・・・
そして

ズプッ！！
「あああああっ！」
なんと怪物は
私のペニスを
挿入したのだ

怪物の膣は
冷たい生肉のような
死体に挿入したかのような
生気の無い冷たさだった

死んだように
冷たいにも関わらず
その膣内は
キュウキュウと動き
締め付けてくる

「や、やめろぉ！
気持ち悪い！
離せぇえ！」

パンパンパンパン！
「うわあああ！」
怪物はピストンを
始めた

一体なぜ
こんなことをするのか
私は必至で抵抗したが
その激しい
腰の打ち付けで
抑え込まれてしまう

パンパンパンパン！
その執拗な腰つきと
膣の締まりに
私の男根はなぜか
異様に勃起していた
「な、なぜ私は
勃っているんだ
こんな死体
みたいな怪物に」

パンパンパンパン！
「や、やめろ！
これ以上
腰を打ち付けるな
こ、このままでは」

（わ、私は、
なにを、
こんな怪物相手に
射精しそうだなんて）

「うわあああ！」
パンパンパンパン！
怪物は言葉が
通じないのか、
全くピストンを
止めようとしない

いや、むしろ
激しさを増している
まさか、
私を射精させようと
しているのか
「や、やめろおおお」

ドビュウウ！！
ビュル！ビュル！
「あああああ！」
私は叫び声と
同時に激しく
射精した・・・

キツイ膣に
締め付けられた
ペニスの尿道を
精液がドクンドクンと
通っていく・・・
そして放出された
精液は溢れることなく
怪物の膣内へ
吸い込まれていった

怪物の膣は
私のペニスを絞るように
キュウキュウと収縮させ、
精液を絞り出していく・・・
「まさか・・・
この怪物は精液を
喰っているのか？」

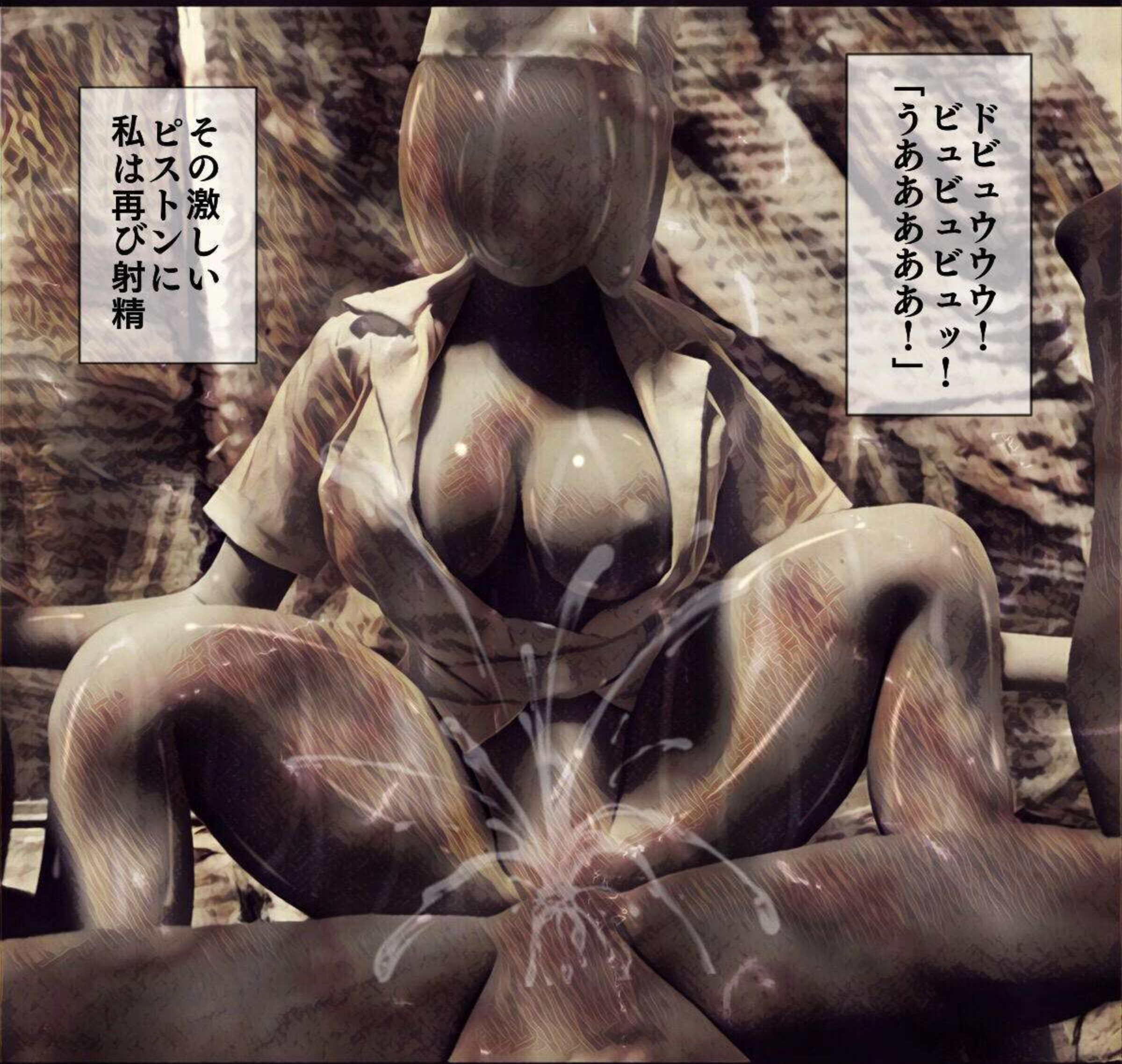
「まずい！このままでは」
私が逃げ出そうと
身をよじった瞬間
精液を吸い出していた
怪物が動き出し、
ふたたび私を抑えつけた

そして再度、
搾精が
開始される

「コイツ、
私の精液を
搾り尽くす気か」

パンパンパン！
私が暴れないように
上からプレス
するような体制で
騎乗位をする怪物

それはまさに
人間から生気を
吸い取ろうとする
死霊さながらであった


ドビュウウウ！
ビュビュビュッ！
「うあああああ！」
その激しい
ピストンに
私は再び射精

ジュルジュル・・・
そして怪物は
その精液を
吸いつく膣で
飲み込んでいく
「も、もう・・・
やめ・・・」

怪物は
私の精液から
生気を得たのか
さらに激しく、
貪るように腰を
打ち付け始めた
パンパンパン！
「うわああ！」

私は意識が
少しづつ
遠のいていくのを
感じる・・
（や、やはりコイツは
私から魂を
吸い取っているのか？）

ドビュウウウッ！
「うぐっ！！」
このままでは・・・
殺される・・・

「離せぇえ！」
私はがむしゃらに
暴れる
そのはずみで
怪物の膣を
下から思い切り
突き上げた

ビクンッ！
すると怪物は一瞬
身体を痙攣させ
動きが止まった
まさか、
コイツは膣が
弱いのか？

私は試しに
連続で膣を突き上げる
すると怪物は
ビクンビクンッと
身体を引きつらせと
震えるではないか

私は
しめたと思い
そのまま
連続ピストンをして
腰を浮かせた
怪物はますます
のけぞっていく

パンパンパンパン！
腰を突き上げ
怪物の子宮に
ペニスを打ち付ける
すると怪物の
腰が浮き上がり

ドサッ！
怪物はそのまま
仰向けに倒れた

「よし、今度はこっちの番だ」
私は起き上がり
怪物を押さえつけ

ズプッ！
私は正常位の
体位で挿入した

パンパンパン！
私は怪物を
やっつけようと
必死で腰を
打ち付ける
ピストンは
効いているらしく
怪物は
金切り声を上げ
もがいている

「いいぞ、これでもくらえ」パンパンパン！
私はさらに腰を早める

「くっ・・・さっきは
恐怖でわけもわからず
射精していたが
冷静に感じるとこの
怪物の膣は
とてつもない名器だ」

締まりもよく、
中はぐっしょりと
濡れている、、
それにこの怪物も
顔と死体のような
肌を除けば、
豊満で肉感的な
身体をしている

「ぐっ・・・
まずい・・・
射精しそうだ
コイツを倒さないと
いけないのに」

「あああああ」
ドビュウウ！！
私は我慢できず
射精してしまった

怪物は
ビクンビクンッと
痙攣し倒れている
その膣からは
私の精液が
ドロリと溢れだした

「ハァ・・・ハァ」
私も射精後の快感で身体が痺れる・・・
これで怪物を倒したのだろうか・・・
私は暫く見ていると

ピクッ・・
怪物の痙攣が
止まり、
再び動き出そうと
身体を起こし始めた
「あっ！まずい！」
私は慌てて
怪物を押し倒す

ズプッ！
私は側位の体位で
怪物を犯し始めた

パンパンパンパン！
怪物は再び痙攣し
抵抗できなくなる
この怪物は
責めてる間は
動けないようだ
どうする・・・
このまま絶頂させれば
倒せるのか？

ドビュウウッ！
「ぐっ！しまった」
怪物の膣のあまりの
気持ちよさに
射精してしまった
しかし、私はピストンを
止めるわけには
いかない

「うおおお」
パンパンパン！
私はこみあげる
快感を振り払うように
声を上げ、腰を振った

なんて気持ちよさだ・・・
吸いつく膣と
柔らかく豊満な身体
こんな相手に全力で
ピストンをして
射精を我慢できるわけが
ない

「うわあああ！！」
ドビュウウウッ！！
私は我慢できず
思い切り射精して
しまった

「あ・・あ・・・」
射精した私は
たまらずペニスを
引き抜く・・・

「これ以上この
膣の中にいたら
どうにかなってしまう
一体何者なんだ
この怪物は・・」

「はぁ・・はぁ」
私は呼吸を整える
「早く再開しないと
またこの怪物が
動き出してしまう」

ズッ・・ズッ
「あっ！」
私が休んでる隙に
怪物が起き上がり
四つん這いで
逃げ始めた

「くそっ！逃がすか」
私は怪物を追いかけ
その大きなお尻を
鷲掴みにする
そして自分の方へ
ズルズルと
引き寄せ・・・

ズプッ！
私はバックから
挿入した

パンパンパン！
そしてそのまま
激しく怪物の尻を
犯す

怪物は
金切り声をあげ
必死で
逃げようとする
私はそのたび
尻を掴み
ガンガンと
ピストンをする

パンパンパン！
「ハァハァ・・・
たまらない・・・
この身体・・・」

気が付けば
私は夢中で
この怪物を
犯している・・・

私が誰なのか
この怪物が
なんなのか
今はどうでもいい

今はただ
この怪物の中に
おもいっきり
精液を
ぶちまけたい
全力で
中出ししたい

パンパンパン
パンパンパン！
私のピストンが
最高潮に早くなる

そして
ペニスの根本に
今まで感じた
こともないような量の
精液がこみあげ・・

「うおおおお！」
ドビュウウウッ！
ビュルビュルビュル！
私は雄たけびと共に
大量の精液を
怪物の膣内に
ぶちまけた

そして、
精液を出し尽くすと
私の全身の力は抜け
怪物と一緒に
その場に崩れるように
倒れこんだ・・・

「あ・・あ・・」
私は射精のあまりの快感に
動くことができない・・

「今、怪物が
動き出したら終わりだ」
私は焦ったが、どうやら
怪物は復活する気配がない

怪物は倒れたまま
動かず、膣からは
大量の精液が
溢れだして床に
精液溜まりができている

すると、さっきまで
小刻みに痙攣していた怪物は
完全に動かなくなり、
やがて煙のように消えてしまった

すると・・
怪物の消えた後の
床にぽっかりと大きな
穴が開いた・・
「な、なんだ？
この穴は？
中は真っ暗で
何も見えない・・」

さっきの怪物は
なんだったのか
幽霊？
では突然現れた
この穴は？
なにもかも
訳が分からない・・・
ただ・・この穴の先は
ここではない何処かに
繋がっている気がする

私は勇気を
振り絞って
その穴の中へ
飛び込んだ

ここに入れば
私が誰なのか
ここは何処なのか
分かるかもしれない
という期待

そして同時に
この先にも
得体のしれない何かが
潜んでいるかもしれない
という恐怖も感じながら・
・
・

第2層へ続く・・